



vol. 166

今月のお題  
.....

## 宇宙を仕事にするには

男子がなりたいたい職業1位が「学者・博士」となって話題に。では、天文学者ってどうしたらなれるのでしょうか？

高梨直紘 (東京大学) / 平松正顕 (国立天文台チリ観測所)



バンドー神戸青少年科学館での講演の様子

「どうやったら天文学者になれるの？」

これは、講演のあとによく聞かれる質問です。筆者(平松)は小さいころから天文学者にあこがれていました。雑誌Newtonに「天文学者になるには」という特集記事が掲載されたのは中学生の時。様々な大学で天文学が学べることを知りました。今ではネットでいくらでも大学の情報は入手できますが、当時はこれが「天文学者への道」へのほぼ唯一の手がかりでした。私は天文学へのぼんやりとした憧れを胸に、他のことはあまり考えずに進んできた結果、たいへん幸いにも天文学でお給料をもらえるようになりましたが、経験からは自分のことしかわからないので、この質問にははっきり答えるのは難しいのです。

先日、バンドー神戸青少年科学館で『研究者の話を聞こう』と題した講演会に登壇しました。講演者は私と、アルマ望遠鏡アンテナ開発を取りまとめた三菱

電機の大島文治さん。天文学者とエンジニアという異なる立場でどのように宇宙と向き合っているかをそれぞれご紹介しました。そして、冒頭の質問も寄せられました。

天文学は、物理学です。物理学には数学も必要です。国際化した学問の場で活躍するには英語も必要で、論理立てて説明する国語力も必要。と、大事な教科を挙げていくときりがありません。研究の基礎体力や研究の道具としてこうした教科はもちろん大切ですが、もしかしたらそれより大切なことがあるかもしれません。「謎を解くだけでなく、謎を見つける力」「先の見えない研究でも粘り強く進んでいける力」「仲間を見つけて、仲間と一緒に協力して研究できる力」。こうしたものも、研究者には欠かせません(私がこれらの力を持っているとは言いません。自戒を込めて)。もちろん、運が必要になるタイミングもあります。

天文学者にならなくても天文学に関わる仕事はいろいろあります。天文学を支える技術者にも、その専門はソフトウェアから機械加工や超伝導技術などさまざまです。品質管理や輸出入、安全管理などの仕事も、巨大化・国際化する天文学プロジェクトには欠かせません。こう考えると宇宙の仕事は実はとても幅広いことに気づきます。そこに至る経歴も、ひとそれぞれでしょう。「宇宙に関わりたいたいという思いだけは持ち続けてね」と私がいつも答えをはぐらかしてしまうのは、こんな理由があるからです。